

Contents

「アクセスは全ての人に開かれているか？」..... 1
難しさと向かうこと(07)..... 2
「第2回プラスランチパーティ」開催..... 5
VOICE 05..... 6
学会探訪..... 7
活動報告..... 9
本の紹介と感想..... 12

「アクセスは全ての人に開かれているか？」

港町診療所 沢田 貴志

「エイズは不治の病ではなく不死の病である」という発言も聞かれる昨今の日本だが、現実には少なからぬ人々が最低限の医療を受けることも出来ずにいる。なかでも外国籍住民のHIV医療への道は狭く険しい。2004年度下半期に某国の大使館は、病院から13人の同国出身者がAIDSを発症して入院をしたと連絡を受けた。多くが滞在資格が切れた状態で働いていた人々であるために、早急に帰国できるように支援を求めることが連絡の趣旨である。しかし、このうち7人が帰国を実現することもなく入院数週間以内に命を落としている。

半数以上が亡くなるという、日本人と比べて信じられないくらいに高い死亡率の原因はなんであるだろうか。脳炎や髄膜炎を起こして始めて病院に行く人、歩くことも出来ないくらいのひどい肺炎になるまで我慢をしている場合が多く、軽症の日和見感染症のうちに診断されることが少ないのである。それは、言葉が不自由である上に医療費の支払いが困難で受診を躊躇している場合や、逆に医療機関の側が「保険がないから」と十分な検査を行わず診断が遅れることなどが原因と思われる。

日本に生活する外国人の人口は総人口の1.7%だが、日本でAIDSを発症する人の中で外国籍住民の占める割合は24%と高い。こうした発症率の高さは母国での有病率が日本よりも高いという理由もあるが、彼らが日本の医療にかかることが出来ないために状況を更に深刻化させているのではないだろうか。2002年に「HIV感染症の医療体制に関する研究班」が行った調査では、1999-2002年に調査対象となった9つの医療機関を訪れた137人の外国人HIV陽性者のなかで、滞在資格がなく健康保険に加入することが出来な

い人の人数は約半数である。そして、健康保険に加入できない人々は13%しか継続受診できていないことが報告されている。大半は帰国したことになるが、帰国後どここの医療機関に行ったかは不明である。ケアがどこで受けられるのかも全く解らない状態で苦渋に満ちた帰国を選択した人、帰国したことにしてそのまま残ってしまってすぐに他の病院を受診することになった人などさまざまであったことが予測される。この時期、ブラジルを除いて一般の人にもHAARTが受けられる途上国はなく、多くの人が帰国後短時間に命を落とされたのではないだろうか。

こうした母国側の事情に変化を生んだのが、2002年に発足した世界エイズ結核マラリア対策基金である。更にWHOが3by5計画を提唱するなど国際社会は開発途上国での治療の拡大に力を入れるべく大きく舵を取った。この背景には、開発途上国のエイズ対策を進めるためには、治療環境を整え早期受診を可能にすることが不可欠だという認識がある。こうして、現在ブラジルに続きタイでも抗レトロウイルス剤のUniversal Access(全ての人にアクセスを保障する)が実現し、他の国でも徐々に医療の改善が進んできている。まだまだ帰国しても医療が受けられない国がほとんどであるが、今後次第に改善がされていくだろう。帰国を希望する外国籍のHIV陽性者に対して母国の医療情報を提供することが更に求められていくだろう。

今、国際社会は全力を挙げて治療へのアクセスが出来ない人をなくそうと取り組んでいる。そんな中で、滞在資格がないからというだけの理由で医療へのアクセスが出来ない人々を放置することが許されていないのであろうか。

難しさに向かうこと

シリーズ第7回目は、ある東アジア出身のゲイのオーバーステイのHIV陽性者にお話を伺いました。日本で彼の暮らしは全く安定していません。また、潜伏しながら暮らすというライフスタイルが、母国でのHIVに関する情報を受取るべくさせています。この日本で、「存在しない」と扱われている彼の語りに耳を傾けてください。

聞き手：生島 嗣

(07)滞日外国人HIV陽性者の向かう難しさ

“母国と日本”“夢と現実”のはざままで

日本に来ることになったいきさつを教えてくださいませんか？

最初は留学するために来たんです。日本語勉強するために、そういう気持ち100パーセントあった。来る前に地元のある有名なホテルのベルマン3年間働いて、働きながら少しずつ日本語、勉強しました。お金は、給料安いけどチップを貯めた。それから、留学の手続きがいろいろ面倒くさくて、やっと23歳のころ日本に来たんです。1992年のことです。

来る前に日本についてはどういう印象持っていましたか？

電気製品。ちいちゃいころから聞きなれた日本のメロディー。「はながさどうちゅう」とか、「りんご追分」とかお母さんもたまに歌うですよ。九人の兄弟があって、僕七番目ですけど、なんとなくそういう貧しい家庭の中、お母さんが歌うと、なごやかになる。あと、春日八郎の「あんときゃどしやぶり」とか。

日本に来てからの暮らしはどんなでしたか？

ベルマンで貯めたお金は120万円くらいだった。それだけです。日本に来たら、学費でしょ、アパートの部屋でしょ。日本の物価とか分からない。最初に住んだのは、都内の6畳一間の部屋です。しかも2人で。9万円かかるんですよ。同じ国のノンケのルームメイトがいて、僕は北のほうの出身で、その人は南のほうの人です。何も知らないで来たんです。僕も、もう一人もそうだったです。

学校はどんなところに行っていたんですか？

専門学校なんです。ビザの関係あります。日本語学校、半年に一回ビザが必要ですけど、専門学校は一年に一回でいいんです。こういう専門学校のビザと大学生の留学ビザっていっしょですよ。

勉強のほかにはどういうことに興味を持ったんですか？

当時まだ20代前半ですし、日本に来たばかりですし、いろいろ見たかった。違う文化のところ、しばらく一年くらい暮らせそうかなと思っていましたよ。

最初はそんなに長く日本に居ようって思わなかったの？

思わなかったですね。まあ、とりあえず一年ビザとって、いろんなところ見て、あとはね、もうひとつ、日本の男はこういう男かな(笑)それは本音。でも、一番おもな目的は、留学と日本語勉強するのですけど。

日本の生活がはじまり、専門学校に行き始めた。その頃はどんな生活だったの？

節約しながら家賃を払って、学校の学費が年に110万円かかるんですよ。日本の私立大学とそんなかわらないですよ。それももちろん払えないし、持っている金もそんなにたくさんないし、じゃあどうすればいいんですかと思って、手紙を書いてうちのお父さんに送ったんですよ。そうしたらお父さんの返事がきて、上司の友達が東京にいて、町で働いているホステス。その人に会ったんですよ。文章とかも書かないで、口の約束で。初めて会った人がいきなり19万円貸してくれた人です。僕もその19万円プラス自分のお金で学費を分割して払ったんです。少なくともあと8ヶ月その学校いられるように。でもそのあとはもう続

かないですよ。当時はアルバイトを探しても断られる、日本に来ていちばん辛いときです。

アルバイト探しはどんな感じだったの？

当時求人雑誌はなかったんじゃないですか？勝手に適当に店に入って、バイトしたいと片言の日本語で話しかけるじゃないですか。日本語通じないし、外国人だし、もちろん断られる。その繰り返しです。困って留学生センターというところに行きました。Yさんという50歳くらいの女性のやさしいかた、けっこういるんどこに電話して聞いてくれたんです。そしたらYさんあるところを見つけて、連れていってくれたんです。レストランの洗い場仕事することになったんです。同じ国の人は僕一人で、あとはいっしょの職場にいた他の外国人です。そしたらいじめられるんですよ。週4日が5日くらいバイトだから大変です。

その時はお金もかせがなくちゃならないけど、日本語も勉強したいという気持ちもあったんだよね。

そこはなかなかバランスがとれなくて。とにかく働かないとカネがない、カネがないと生活できない、生活できないと学校行けないですよ。そういうひどい時代だったです。いじめがあってもやるしかないじゃないですか。もしカネ払えなかったら、学校を退学という手続きをしなければならぬ。外国人登録書も返さなければならぬ、それはもっとも心配することです。

生活の中心が学校じゃなくて、アルバイト中心だったんですね。

やむを得ない状況です。でも当時バイトが始まったばかりで、カネもそんな余裕がなく、学校の定期券とか毎日の食料とか、あと、日本の気候とか慣れないから、ちょっとセーターとか、安いの買ったの、日本のほうが寒いから。やっぱり生活の用品とか日本に来てから何もなかったですから。でも考えてみると、学校の方は行ってもこれからつくく学費がどうする、学校の出席率も80%要求されるんですよ。けっきょく退学をするしかなかったです。

当時はかなり大変な生活だね。気持ちはどんなだったの？

このころ、国に帰りたい気持ちまだそんなにないけど。1年間のビザ切れるまでは、辛抱してお金をためるしかないって。ルームメイトとの関係もあるから、一年間いっしょに住む契約、やっぱりそういう風になると迷惑がかかるでしょ、義理あるでしょ。部屋は1年1年更新するじゃないですか。その更新するときにいちばん良いタイミングじゃないかと思ったんです。

アルバイトと学校以外は どうだったんですか？恋人を見つけたり、セックスの相手を探したりという行動は起こしていた？

日本は当時もゲイ雑誌あったんですよ。新宿2丁目っていうゲイタウンは海外でも知られてるじゃないですか。2丁目の本屋で立ち読みをしたりとか、サウナ系のところに行ったりもしました。1回行くと、2回、3回と通い続けるようになったんです。まだ、20代ですし、いろいろな人と遊びたいし、セックスしたいし。

当時、HIVのことはどういう風に思っていたの？

日本に来る前に、エイズっていう病気がテレビで少し見ただけで、詳しいHIVのこととかは知らなかったんです。国では、同性愛は社会的には許されません。だから同性愛者の活動とか、HIVとかエイズの防止の対策とか、一切、重視していなかったんです。

サウナでHIVのことは気にしていた？あまり気にしていなかった？

気にしますけど、相手がナマのほうが気持ちがいいとか、正直の話、自分もナマのほうが気持ちいいですよ。あと、中出しとか、そういう快感っていうのがあるし。ゴム付けてもらったりとかもあるけど、シチュエーションによって違うんですけど。まあ、おまかせというか……。

セックス以外にも、いろいろな人と交流があったりしたのかな。たとえば恋人関係になるような人とか。

93年にサウナで今のカレシに知り合って、何回か電話で話したり、ご飯食べたりとか、しばらくしたら、彼の住んでいるところまで通って泊まりに行ったりするようになったんですよ。それで、前のルームメイトと大家さんと3人で話合って、3ヶ月の自分の分だけ払って、先に出ちゃったカレシのところ。

日本にきて一年たったときに、ある程度お金をためて帰ろうと思っていたよね。でもカレシができたときに、どう思ったの？

やっぱり1回目のピザ切り替えのときにいろいろ考えたんですよ。この人といっしょに居ても、どれくらい続けられるんですか。留学は失敗で国に戻ったらどうなるのかなあと。思って。新しいカレシと、どっちがいいか、どっちがいいかって。そうしたら2回目のピザ、観光ピザ取ったんですよ。観光ピザ、3か月ですよ。そのきっかけで、もうそれからずっとピザ切れても日本に居るわけですよ。もちろん、当時はこのバイトもしているんですよ。ピザについては言えないですね。向こうも訊かないし。

カレシとの生活はどうだったの？

日常の生活は問題なかったね。でもセックスのパターンが違うの。当時、カレシはまだ30代の人で、僕は20代で、カレより僕のほうが遊びたいし、だからつついカレシに黙って、そういうところ、男捜したりしたけど、たぶんしばらくしたら彼も気がついて、でも訊かなかったんですよ。ラブオイル見つけたり、ラッシュ見つけたりとか、何も言わないですよあの人。コンドーム見つかったりとか、何も言わないですよ。だからそういう、僕に対しては、そういう、なんていうか、許す気持ちとかあるから僕がいっぱい遊んでたんじゃなしかと思うんですけど。

しばらくしてからHIVのことがわかったのは梅毒がきっかけだったそうだけど？

1995年だったと思う。からだ中に赤いボツボツができて、そしたら全身に広がって、職場の近くのクリニックに行っただんですよ。そうしたら、何の病気が分からない、大きな病院行ったほうがいいですよ、そう言われたんですよ。でも皮膚科ですよ、いくらちいちゃんクリニックでも分からないはずないでしょ。まあ、わからないまま、A病院に行っただんですよ。

A病院の皮膚科に行ったら梅毒だって言われたの？

そうです。バイシリンというクスリをもらって飲みました。ピザが切れていて健康保険とかもないんですよ。一番最初は覚えてたのは3万4万くらいかかったんですよ。たぶん、初診料とか、採血とか、検査料とかいろいろかかるんじゃないですか。大金なんですよ。バイトの時給が950円で、一日バイトする時間8時間が9時間ですね。一日働いて9000円くらいですよ。

その時にHIVのテストもしたの？

あの頃がもうHIVに感染したかどうか、はっきり覚えてないんですけど、でも病院のカルテは95年、ああこういう病気がかかってしまっ、たぶんHIVの感染は実は高いですよ梅毒かかったら。覚えてるのは、採血が1回ですよ。もしかしてその1回で全部分かっちゃったかなあ。そのときかどうか覚えてないんですけど、病院の先生からHIVの感染とかなんとかいう、このころから気がついたんですよ。HIVに感染したらどういう大変なこととか。

カレシとはもうお付き合いしていたんだよね。

そうです。会った当時は、アナルセックス僕から要求で、してくれたんですよ、ナマで。94年のころ、まだラブのころ。彼はアナルセックスもともと好きじゃないけど要求をのんでしてくれたんですよ。僕この病気がわかって、先生から聞いた話で、もちろんびっくりしますし、すぐにHIV検査にいったほうがいいですよってカレシに。そしたら、検査した結果大丈夫だったんですよ。ほっとしたんですよ。

その後、A病院とはどういうお付き合いをしていたの？定期的に行っていたの？

バイシリンもらいに行ったりとか、症状診てもらったりとか、あとは、ほかの話はなかったんですよ。2回目やっぱ診てもらって、何回か続いたら、梅毒のあとが消えて、治ったら自然に病院に行かなくなったんですよ。

また前と同じ生活に戻ったりしたんですね。

当時は1年か一年半、セックスの生活すこし謹慎して、なんか気をつけてましたけど、またそのあとけっこう遊んでたんですよ。HIVなんかも頭になかったんですよ。もちろんセックスはゴム、相手に、つけたり、つけなかったり、おまかせ。

HIVの血液検査とかは、その後どうしていたんですか？

このころは気にしていなかったんですよ。A病院に行っていたときは、×××××という日本名でカルテを作って自費でお金は払っていたんですよ。4週間に一度くらい、×××××の名前で、バイシリン飲んで、HIV陽性で、A病院はすごく大きな病院です。内科の先生も耳鼻科の先生もたくさんいるけど、HIVの専門の先生はいないでしょ。

あなたの体の状態が、どういう状態ですよとかいう話は聞いたことがあった？たとえばCD4とかウイルス量とか。

たぶんあると思うけど、覚えは残ってないです。まあ説明は向こうはやっぱりそういう医療関係の人だから、説明はしてるはずですよ。

それじゃあ、ドクターからはどんな話がありましたか？

セックスは気をつけなさいよという話は、はっきり覚えているんですよ。

HIVに感染したらどういうふうになっていくかっていうのはだいたい知っていたの？

だいたい知っていた。最初知った症状はカボジっていう、カリニ肺炎とかも病院からきいたんですよ。カンジタとかは、あとで、なってから教わったんですよ。自分の健康とか、自分いままで、ばかばかりしてたかなと思って後悔してるんですよ。

具合が悪くなったのはいつごろ？

2003年の秋です。9月なのに寒くて、少しずつ病気がひどくて、A病院通ったんですよ。咳がひどくなってきて、肺炎って言われて、しばらくしたら、バクタを飲んで、バクタの薬の副作用で、もう死にそうになって、激しい頭痛とか、めまいとか、夜中に救急車で運ばれたりとかしたんですよ。

そのときは×××××さんという名前で？

そうです。救急隊員いろいろ訊かれるです。名前とか住所とか、言えないじゃないですか。病気で体の調子も悪いし、どういう症状ですか、必ず訊かれるんですよ。もうその運ばれるの間にもつかったんです。うそをつかなくちゃいけないし、ばれたら追放される心配あるし、そんな、すなおになれなくて、その気持ちは一番つらいですよ。もう、A病院に通うたびにそうだったんですよ。あくまでも自分の正



体は言わないまま、まあ病院の側もわかってる。それでまた病院に行かなくなったんです。仕事あるけど、咳がとまらなくて、1か月して病院に行ったんですよ。

そのときにB病院に転院っていう話はあったの？

なかったですよ、最初はやっぱり咳がとまらないから、自分がどうなっているのかなと、カリニ肺炎だって言われて、そしたら、あの病院HIVの専門の医師がいないから、Kという先生、内科の先生だったのかな、でもぜんぜん治らないですよ。いろんなところに回されたけど。カリニ肺炎とカンジタ症がいきなりやってきて、うまくしゃべれないですよ。

そのときに、カリニ肺炎とカンジタ症の治療はA病院でしてくれましたね。

なんか知らない軟膏をぬってくださいって。そういうシチュエーションだから、自分も何も知らないから、もちろん先生の話聞きたくないじゃないですか。いろんなところに運ばれたりとか、カレシもいっしょにきたりとか。一度、A病院で倒れたんですよ、受け付けのまえのソファで。あの日、本当に死にたかったんですよ。なんて言うのかな、やっぱり、病院に行っても、医療とか受けられないのは、それかなりの疑問が感じていたんですよ。なんでこんなデカイ病院なのに僕の病気がなかなか治らないですか？って。で、紹介状を書いてもらって、B病院に来たんです。

B病院に行ってからはどうになりましたか？

××××の名前をそのまま使っていこうと思うけど、看護師が、これ本名じゃないですよって訊かれるんです。なかなか、本音が、自分がどういう人なのか、本名がなかなか言い出せない、っていうか言いたくないですよ。治療を放棄するか、しばらく考えていたんですよ。最後、本名とか歳とか全部はつきり言うんですよ。

ずっとウソをついていて、つらくて、強制送還を心配しつつも、だけど本名を全部言ったのはなぜ？

B病院入院するまでは、もう日本に来て不法滞在10年近くになっているから、ここまで守ってきたウソとか、もちろん言いたくないけれど、どうにもならないじゃないですか。本当に具合が悪くて、入院したんです。病気のこと、話すのさえつらくて、口はほとんど開かないですよ、筆談というか、日本語を書いて、そういう状態だったんですよ。少しずつ口が開けるようになってきて、いろんな看護師が話しかけてきて、カンジタどういうふうによれば、少しずつ元気になる方法とか教えてくれるんですよ。21歳の新人の看護師、けっこう教えてくれたりとかするんですよ。B病院の先生や看護師さんの心づかいによって、ウソがとけた、ばれたっていう感じがするんですよ。

日本人のHIVに感染している人たちがどうしているか知っていましたか？

知らなかったですよ。日本人との交流はカレシ以外、あと職場での日本人、でもこういう話できないですよ。カレシもそういう話あんまりできないし。やっぱり他のHIV患者のどういう生活しているか、それもわからないし、日本人の場合も、いろんな保険も使えるし、僕の場合にも使えないですよ。

他のHIVに感染している人に会いたいとか、話をしてみたいとか、思ったことはある？

話は聞きたいけど、でも、会うのはあんまり。まあ、できるだけ会いたくない。会いたくないじゃなくて、やっぱり同じ病気かかっている人間が、おんなじの痛みがみんなが同じような、気持ちがあるんじゃないですか。僕の場合、HIV感染者だけでなくエイズですよ。話を聞きたいけど、会うのはもう少し時間かかるかもしれないけど。



初めて会ったとき、ドクターからぶれいす東京のこと

を聞いてたけど、なかなか連絡をできなかったって言ってたよね。最終的に電話くれたのはそれはどんな気持ちだったの？

最初は拒んでいたんです。なかなか勇気がなくて。やっぱり少し怯えながら、話を少しずつ言えるんですよ。やっぱりB病院行って入院して、看護師たちがいろいろ話をしてくれて、素直さ、少しずつ。それはきっかけ、大きなきっかけ。今まで人生が中途半端、けっこういっぱいやってきて、もう日本に来てから、ウソにウソ固めてきたんですよ。体調が悪くなってもどうにもならない状況で相談してみようと思った。でも、なかなか勇気がなかった、不法滞在だし。

それはすごいストレスだね。

かなり。回りの人間にできるだけ、ウソを言いたくないから、親密な人間関係できないですよ。親しい関係とか良い友達とか。もう、同性愛者とか、それは言えないでしょ。

途中で国に帰ろうと思ったことはあるの？

ありますよ。それはもちろん。帰ったら何をするか、もうこういう病気になっているから、歳も30代、なににもできないでしょ。帰るのはたまたま考えるけど、家族は他の8人兄弟どうなっているのか、それもちろん知りたくないけど、いまこういう病気、家族とか兄弟に言えないでしょ。経済力もないし。帰っても兄弟いっしょに住めないでしょ。それぞれの家庭も持っているから。

日本にきてから家族との連絡っていうのは？

最初のころはあったんですよ。あの19万円借りたホステスさん、そのあとはこの方が引越したんです。引越したまま行方がわからなくなっちゃったんです。僕も返さないままで。お父さんがその女性が今どこに住んでいるか、分かるかもしれないけど、僕は手紙書かなかったんですよ。あれから10年過ぎて、返さないままの状態ですよ。それもいけない話です。返さないで、家族に連絡も取ってないし。いま家族みんなはどうなっているのか一番知りたいです。帰るのは情けないし、帰っても何をできるか、カネも必要だし。

最後に日本の人たちに、普段感じていたり、なかなか言えないこと、こういうことは知っておいて欲しいことはありますか？

ないですね。今考えているのは、やっぱり、病気がすこし元気になって、もう少ししたら仕事復帰して、おカネが少したまったから、これからずっと日本にいるか、帰るか。日本に居ても、薬もないし、何もできないですよ。HIVの薬がないから入退院くりかえしますよね。でも、日本にいるほうがまし。帰るのは簡単なことではないです。日本に対しては、大好きですよ。

この10何年間の暮らしはカレシのおかげで生活できた。カレシに出会っていなかったら、違う人生をおくったかもしれない。こんなやさしい日本人がいるから…。僕が一回、言ったんです。なんで不法滞在でHIVに感染した人と同じくあつてるの。別れてもいいよって。同じ国の人とか、若い人と同じくあつた方がいいんじゃないと言ったら。「つきあっているんだからしょうがないじゃない」彼は言っていました。それを聞いて、バカっていうか、感謝っていうか、複雑な気持ち。僕は彼をうらぎって、HIVにかかってしまったのに僕を見捨てないでずっとそばにいて欲しいと言ったので、それってバカでしょう。彼に対しての気持ちは、僕よりも健康な人、若い人と同じくあえば、これからの人生も明るく楽しいはずなのに、僕の病気も一生なおらないから、前からそういう思いがずっとあるんだけど。彼に何回も言ったけども、返事は「そんなこと言ったってしょうがないでしょう」で、同じ返事がかえってきた。やっぱり涙がでてくるね。

きょうはいろいろ話してくれてどうもありがとうございました。

「第2回プラスランチパーティ」開催

HIV陽性者、パートナーが参加することができる交流会「プラスランチパーティ」が10月30日に開催されました。第2回目となる今回も、HIV陽性者とパートナーが中心となって企画、アユス、クリアチーボス、SHAREの協力、ジャンププラスの後援をえて開催されました。5カ国から36名の参加があり、幹事やスタッフも含めると総勢48名。国際色・郷土色豊かな料理が並び、暖かい雰囲気のパティとなりました。

「プラスランチを開催して」

けるろ

プラスランチパーティーは、食べ物を持ち寄ることでHIV陽性及びそのパートナーの人が気軽に集まり、交流できる場があればよいのに、という話がきっかけで昨年に初めて開催され、今年は第2回目でした。国籍を問わずひろく参加者を受け入れられるよう、英語、ポルトガル語、タイ語に対応可能なボランティアスタッフを募り、一定のコミュニケーションが確保できるよう準備したのも、このミーティングの大きな特徴です。また昨年に引き続き今年も複数の支援団体の後援、ご協力を仰ぐことができ、事前広報や、当日の参加者サポートで大いに尽力下さり、スタッフを支えていただきました。

当日は参加人数が危ぶまれるような天気予報でしたが、昨年を上回る参加をいただき、会場が手狭に感じるほどの大盛況でした。また5カ国からの参加者があり、初めて見るようなお国自慢の手料理をたくさん持ち寄っていただき、改めてHIVの国境を越えた広がり、HIV陽性者の多様性、それは日本国内でも同じ状況であること、を実感することができました。

プラスランチパーティーはようやく2回を無事終了することができましたが、今後ともHIV陽性者をめぐる様々な企画のひとつとして、ボランティアスタッフ、主催、後援団体、参加者の方がそれぞれ、小さいながらも前向きな意味付けをしていただくことができれば、今年企画に携わった者としてこれに勝る喜びはありません。

「ランチパーティー初参加」

タッパー

僕は、つきあっている彼がHIV陽性となり、周りに相談できる人がいなくて、ぶれいす東京の陰性パートナーミーティングに出るようになりました。そこで知り合った方々に今回のランチパーティーを教えて頂き、彼と参加しました。僕と彼には、HIV陽性の友達が少なく、普段から病気の話をほとんどしないで、二人でひっそりと暮らしている状態なので、陽性の方がたくさんいらっしゃる場に出るというのは大きな出来事でした。今回は二人のタブーに正面から向き合うかのように、参加に消極的な彼を無理矢理連れて行きました。どの方が陽性の方なのかは分かりませんでした。みなさんが明るくお話されていたのが心に残りました。

彼の彼は、薬を飲むのが辛いらしく、「飲みたくない」と、よく言っているのですが、自分以外にも頑張って薬を飲んでいる人がいるんだと、何となくでも感じてもらえたんじゃないかと思います。また、自分一人じゃないと思える事は彼にとって僕にとっても大きな前進だったと思います。

みなさんから頂いた明るいエネルギーのおかげで、僕達の心に前向きな気持ちが芽生えたようです。参加されたお一人お一人に感謝の気持ちです。ありがとうございました。

「ぶれいす東京・ネストに集う皆様へ」

CRIATIVOS 栄口 ルイサ

毎年、日本にいる様々な国籍のPWHAの方々やその家族を招いてランチパーティーを開かれていることへのお祝いを申し上げます。そして、いつも私たちをお招きいただきまして有難うございます。このようなパーティはとても有意義だと思います。

ひとつにはPWHAの人たちはこの会に出席することができたという、そのことで不安や恐怖心を克服することがで

き、加えて同じ境遇にある多くの仲間やそれを支援する人々と知り合う機会を与えられたからです。

私たちのグループのPWHAのあるものは日本語が全然わかりません。しかし、あのパーティではぶれいす東京・ネストに集う方々の暖かいおもてなしの心を十分に感じる事ができたと申しておりました。それはきっと、彼らと共にその個人的体験を分かち合おうというみなさんの意欲と希望が言葉の壁をやぶる強い力となっているからでしょう。今回お招きを頂きましたPWHAの人たちも、パーティの終了後、今後ぶれいす東京の活動への参加や協働の希望を述べておりました。

個人的にも、私がやっておりますPWHAのミーティングの参加者が少なく、挫折感を味わっていたときも、常に私を励まし、やり続ける意欲を持たせてくれたことに感謝いたします。今では毎回私のミーティングにも参加者がおり大変よい集まりとなっております。次のステップとしてPWHAが自分たちでミーティングを組織し実行できることが望ましいと私は思っております。

今後のぶれいす東京・ネストに集う皆様のさらなるご発展をお祈り申し上げます。

「感謝」

D.B

まずいろいろなことを言う前に、ありがとうと言いたいと思います。パーティはすごく素敵だったし、すごくよかったと思う。こんなにいい雰囲気素敵なお人たちといれるなら、3ヶ月に3回は開催すべきだと思います。(笑)

私たちHIV陽性者にとっては、最初に陽性であるとの告知を受けた時はショックを受け、家族の支えがあるにせよ、やはり時々意気消沈する傾向があるんですね。同じ病気を持った者同士、みんなしていると、同じ気持ちを分かり合えるからか、その経験を分かち合えるからか、少しは気持ちが楽になる気がするんです。

もう一度、本当にありがとう！

「穏やかな空気の中で」

特定非営利活動法人シェア = 国際保健協力市民の会

西山 美希

たくさんの方が部屋の中にいるのに、穏やかな空気が流れていて、皆の波長がぴったり合っている気がする。今回初めての参加だったが、なんだか初めてとは思えない居心地の良さ…。パーティの間、シェアタイの活動地の陽性者グループの方たちのことを何度も思い出しました。タイでの陽性者の方たちのグループ活動に、私が参加しているときの、穏やかな気持ちになる感覚がとても似ています。なぜかタイのみんなの顔が次々に浮かんできました。

今回気づいたことは、感謝する気持ちはとても大切だということ。皆さんの一人ずつの自己紹介や感想では、まず感謝の言葉からはじめる方がとても多く、当たり前のようにただけれど、普段忘れがちだったということをもふと思い出し、とても新鮮な気分になりました。今日はスペースの関係であまり多くの方とお話できませんでしたが、私にとって自分を振り返ることもできた、とてもすてきな一日でした。また次回もさらにすてきな会になることでしょう。



持ち寄った料理も国際色豊か！

VOICE 05 Our Future ~ 私たちの未来 ~

11月26日に四谷区民ホールにて、ゲイ・バイセクシュアル男性向けHIV啓発イベントVOICEが今年も開催されました。来場者は483名で入場制限をしなければならないほどの大盛況。出演者101名、スタッフ33名、合わせて600名を超える大イベントとなりました。

「VOICE05のご報告」

今年で9回目となる「VOICE」は、11月26日に四谷区民ホールにて開催されました。開場時間は17時と前年より30分早かったのですが、開場時間前より並んでいた方も多く、開場と同時に大勢の方がホールへ入っていきま



フィナーレは今年も全員で大合唱

前日まで行っていた新宿二丁目やバー・ハッテン場・クラブイベントでのフライヤー配布や雑誌・ウェブでの告知の効果も少しはあったのか...などと考えるのも束の間、エレベーターがホールの階に到着するたびに押し寄せる来場者の皆様でたちまち客席はあらかた埋まってしまう

開演時間になってもまだお客様は途切れず、気が付けば450席のホールは満員御礼に。消防法の関係で立ち見を容認するわけにもいかず、受付周辺のスタッフは空席チェックや急ごしらえの整理券発行、入り口でいったんお待ちいただくことになった来場者の方への説明に追われました。満員礼止めの際のシミュレーションが甘かったことは今回の大きな反省点の一つです。

ステージはNONOCHICの皆さんのダンスパフォーマンスに始まり、ブルボンヌさん・肉襦袢ゲブ美さんのドラッグクイーンショー、藤本大祐さんの弾き語り、スキンエコーの皆さんの合唱と続いて、前半の最後にはPERSONZのJILLさんのビデオを上映しました。後半は今回はオーケストラ編成のdivertimentoの皆さんの演奏、ペーすけさんのピアノとトーク、オナン・スペルマーメイドさんのショーと続き、UC&NONOCHICによるダンスレビュー、そして最後は昨年同様全員で「世界に一つだけの花」を合唱しました。

これらのプログラムを軽妙なトークで進行してくださったMCのペーすけさん、エスマラルダさんをはじめ、素晴らしいパフォーマンスを見せてくださった出演者の皆さんのおかげでこれだけの集客ができたものと思っています。お帰りになる来場者の皆さんが満足そうな表情をなさっていたことが何よりうれしく感じました。



司会のエスマラルダさん、ペーすけさん

スタッフサイドは満員の対応以外にも様々な反省点がありましたが、反省すべき点はきちんと反省して今後活かしていきたいと思

(文責：sakura)

VOICE 05 来場者のアンケート

アンケートによると来場者の約6割は都内在住で、長野や栃木からもお越しいただきました。約6割が「パフォーマンスを見るため」に来場しており、多くの方がプログラム内

容を楽しみにしていたようです。

ほんの一部ですが以下がVOICE05の感想です。

(文責：ふきの/たかし)



NONOCHICとドラッグクイーンのコラボレーション

「楽しませて考えさせる素敵なイベント、今後も続けてください」(38歳、都内在住)

「ここまで有名になったのだから、もう会場が狭すぎる」(44歳、都内在住)

「下半身系でなく、上半身系のこういうイベントもあるのがとても素晴らしい」(41歳、都内在住)

「これ以上悲しみを抱える人が増えないで欲しい」(34歳、神奈川在住)

「HIVに感染しても何とか生きていけるような気がしてきました」(32歳、都内在住)

「メッセージが押しつけでなく、それぞれに感じ取れるビデオでよかった」(住所不明)

「自分は周りの人々に支えられて生きている事、そしてその人々を大切にしていかなければならないという事を実感しました」(38歳、千葉在住)

「POSITIVE VOICES」

VOICE05で上映したビデオは、ロックバンド『PERSONZ』のボーカルJILLさんとHIV陽性が判明したあるリスナーの交流から生まれた、新曲『HIVE』の誕生エピソードを映像化したものです。



JILLさんへのインタビュー

『PERSONZ』は1984年、JILLさんを中心に結成。1980年代のバンドブームの中核を担い、数々のヒットを飛ばし、現在もオリジナルメンバーで活動を続けています。

JILLさんはインターネットを通じてリスナーと交流をはかっています。2001年6月、あるリスナーからHIV陽性が判明した事を告げるメールがJILLさんの元に届けられました。JILLさんは何気なく読んだ時、かなりショックを受けたそうです。これからの事を考える内容をメールの文面で読んだのは初めてで“かける言葉”を探してしまったそうです。でもリスナーはJILLさんの飾らない真っ直ぐなメールと“ひとりじゃないのよ”と歌ったPERSONZの楽曲『DEAR FRIENDS』、それと彼を支えた友達の存在により前向きに生きて行く力をもらいました。

2005年10月4日、今回のビデオ撮影のため、鎌倉の七里が浜にて、ぷれいす東京の生島さんがJILLさんへのロングインタビューを敢行しました。最初はペンション風の屋

内スタジオでインタビューを行い、PERSONZ 結成や JILLさんについての様々なエピソード、そして今回のインタビューの中心であるリスナーとの交流のきっかけなどをうかがいました。心配していた天候も日が射すまでに回復し、屋外という開放的な環境でリスナーとの交流から生まれた「HIVE」という曲を海をバックにアカペラで唄っていただきました。インタビューの撮影および編集は東京レズビアン&ゲイパレード 2000～2001の模様をドキュメントした「ALWAYS PROUD」の制作を担当した、まれっとさんに依頼し、素敵な作品に仕上がりました。

リスナーに“かける言葉”があるとしたら、それが音楽なのかなと語るJILLさん。傷ついた事を乗り越え『DEAR FRIENDS』が生まれ、傷ついた人に掛ける声を探して『HIVE』は生まれました。

音楽から発生した心のループ、人の温かさを感じられるビデオだと思います。ぜひ、今後も上映する機会があると思いますのでご覧ください。(文責：亮壱)

出演：JILL (from PERSONZ)

インタビュー・企画：生島嗣(ぶれいす東京)

亮壱(ぶれいす東京)

構成・ビデオ撮影・編集：まれっと

機材協力：(有)ジーププロジェクト

照明：田口弘樹

後援：(財)エイズ予防財団

著作・制作：ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS

OUR DAYS

毎年のイベント「VOICE」の開催とともに、毎年の恒例になっているのが陽性者の手記集の作成です。これまでもVOICEの開催に合わせて、陽性者の手記をまとめて「Living Together」シリーズとしていろいろな形で冊子にしてきました。

今回は「OUR DAYS」とタイトルをつけて、陽性者が生活していく毎日の中で、経験したこと/感じたこと/考え

たことを、読んでいる人に直接伝えられるような冊子を作りたいと考え、雑誌G-menで連載されている「僕らのPositive Diary」から手記を掲載させていただきました。20代/30代/40代、3人のゲイの陽性者がそれぞれに送るpositiveな日々を書いた手記、それに手記を分かりやすく読んでもらえるように、陽性者の生活に関するQ&Aを加えてテキストを作成しました。このテキストに3名の写真家から提供していただいた写真を加えてデザインし、手記と写真がマッチしたとても素敵な冊子となりました。

まだご覧になっていない人は、ぜひ見て・読んでみてください！！(文責：おやかた)

テキスト：ようすけ、しんいち、タカシ

企画・編集：おやかた、生島 嗣(ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS)

写真：kit、磯山龍朋、ないつん

制作協力：田口弘樹

デザイン：MMK graphic

なお、この冊子は、「平成17年度厚生労働省エイズ対策研究事業『男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究』」の一環として発行されました。



「OUR DAYS」の表紙

学会探訪

第19回日本エイズ学会学術集会在12月1日-3日に熊本にて開催され、併せて12月2日に研究成果発表会「知識から意識へ - 予防介入の実践とその評価 - 」(主催：(財)エイズ予防財団、運営：ぶれいす東京)が行われました。

「第19回日本エイズ学会学術集会・参加感想文」

福原 寿弥

久しぶりに飛行機に乗って降り立った初めての熊本は、気の早い青い光が聖夜を祝う夜の街に、威厳をもって佇むお城の姿を映し出していました。

今年度のエイズ学会は、熊本市において12月1日～3日に開催されました。市民会館内に3会場、向かいの国際交流会館に1会場で開催され、一般演題は318題。基礎系演題が市民会館から道を隔てた場所に集められており、日頃の敷居の高さが助長され顔を出さずじまい。(演題を紙面にて掲示する)ポスター展示がなく、シンポジウム数も少なく、全体にこぢんまりした印象でした。夏の神戸国際会議の影響な

のかも？内容的には新規薬剤の実績報告が目立ち、一方で治療ガイドラインに大きな変化はなく、社会教育系セッションが少なかったなどの印象を得ました。

個人的に興味を覚えたのは「医療体制」のセッションで、若年で寝たきりになった陽性者の在宅療養支援の経験から、拠点病院の地域において果たすべき役割を模索した発表がありました。拠点病院の多くは急性期医療を担っており、長期療養が必要となった場合に出来ることは何か？どんなネットワークが必要か？日頃ぶれいすで活動する私にとって興味深く、今回我々が牧原の発表した「パディ派遣サービスの利用者のニーズに関する考察」とも関連し、思わずNGOもいます！と声を出しそうになりました。

また地方の拠点病院から、都内に比べ患者数こそ桁違いの状況があるにせよ、ここ数年の確実な増加傾向に今こそやるべき事は何かといった、ある意味、勇気ある決意表明が聞かれました。「地方では患者も孤独、医者も孤独。」現場の声にしばし感動。ここでもNGOがお手伝いできるかも！と声を掛けたくなりました。



めずらしく？真剣な顔つきで発表する牧原

特別プログラムでは「水俣病とハンセン病」と題された講演が印象的でした。学会長からの説明通り、熊本に特徴的で、その普遍性が今なお社会的に問題を含んでいるこれらの疾患を通して、HIVについて見つめ直す機会となりました。熊本は、俗にハンセン病の神様といわれる加藤清正が祀られており、最初の公立療養所の開設から国家賠償訴訟・ホテル宿泊拒否事件まで、ハンセン病との関わりが深い地とのことでした。業病といわれ、明治の近代化や軍国主義の陰で社会から強制的に隔離され、感染症、しかも感染力のきわめて弱い菌によるものと分かった後にも続いた数々の差別。感染症に付いて回る偏見・排斥といった考えを学ぶための“負の遺産”。東京にも清瀬にハンセン病資料館があります。

また、人類が初めて経験した、自然環境を介した食物連鎖によるメチル水銀中毒事件である水俣病は、産・官の無策が生理的・社会的弱者を追いつめるという、今日に通じる課題を明確に提示していました。繰り返される歴史の中で普遍性を捉え、生かしてこそ人類の英知。HIVには、まさにそのことが突きつけられているのでしょうか。

総会では、次期会長の我が池上から報告がありました。テーマは“Living Together”何だかワクワクしませんか！

夕方なのに、夜なのに---満員となった平成17年度『池上班』成果発表会

徐 淑子

学会2日目の12月2日夕刻、平成17年度「池上班」の成果発表会が行われました。「池上班」とは、=平成17年度厚生労働科学研究費エイズ対策研究事業「HIV感染予防対策の効果に関する研究」研究班=の略称です。正式名称をこうしてフルに書いてみると、なんだか「ぶれいす東京」の開かれたイメージとは不釣り合いに、とても堅苦しいかんじがします。しかし、池上班とは、マダムありミニスカありアニキありオネエありフェミあり子持ちありイナカ者あり...と、カルチュラル・ダイヴァシティならびにライフスタイルの多様性という点ではぶれいす東京の他のどの活動グループと比較しても勝るとも劣らずの定義不能集団なのです。

さて、成果発表会の当日。開始は夕方、終了は夜の8時過ぎだというのに、会場には予想を超える人数を迎えました。



エイズ予防財団の福原専務理事(左から2人目)を交えて

来場者は「知識から意識へ～HIV予防介入の実践とその評価～」(現代の日本をとりまく難しさの中で「若者の性の健康」にどう実践的に取り組むか?を考えます)という広報の文句にひきつけられ、なにか「まっとう



会場の質問に答える研究班のメンバーたち

なもの」を期待しているにちがいません。「新しいものを見せてよ」という声も聞こえてきそうです。果たしてこの期待に応えることができるのか、行政や、医療、教育、研究に携わる新人からベテランまでの人々や、思春期問題に関心をよせる一般市民に納得してもらえるのか。筆者は、来場者に資料を配りながら、一人不安を感じるのでした。

発表会は、池上代表のスピーチから開始されました。タイトルは「新しい予防教育の戦略」。『予防教育』といっても、私たちがやりたいのは社会防衛の強化とはちがうんです、ケアと予防はかならずセットなんです、と池上さん。「みんな聞いてる---?ここ大切、ここ大切!」と心の中で叫ぶ筆者。ここをきちんと押さえていないと、池上班では陽性者の手記朗読活動(LTプロジェクト)がわざわざ予防介入の枠組みに入っていることの意義や、その新しさがわからない。池上さんのスピーチを聞きながら、「排除は予防ではない」ということをいつも気に留めている人が、現場に地域に、少しでも増えることを念じました。

その後、筆者による「ピアによる教材とその効果」と映像教材“Let's CONDOMing”デモ版の試写、生島嗣さんによる調査とLTプロジェクトの報告「HIV陽性者による周囲への告知の影響に関する調査」、兵藤智佳さんによる「自治体による当事者性を生かした取組」と進んでいきました。

LTプロジェクトなどは、すでに、現場の啓発活動に明日にでも適用できそうな形にまで仕上がっています。聞き入る来場者の様子も真剣で、発表に寄せられる関心のつよさが雰囲気から伝わってきます。兵藤さんの発表では、「よくぞ、ここまでことばにしてくれた」といったような笑い(苦笑い?)が会場からもれてきます。少々加熱しすぎのピア・ブームに、兵藤さんの「ピアでそれなりの効果を上げるには手間ひま惜しまない世話が必要」という現実を率直に伝える発表がどんな影響を与えるのか、その後が楽しみです。筆者の担当については、「年度末の教材パッケージ完成をお楽しみに!」の一言でまとめたいと思います。

筆者の杞憂をよそに、来場者のみなさん各自が現場へのお土産話を得た様子でした。池上班一同もほっと一安心し、その後、飲み屋で盛り上がった次第です。(おしまい)



学会の受付周辺の光景

活動報告他

各部門より

● ホットライン

エイズ電話相談（ぶれいす東京および東京都委託）

ホットライン・ミーティング他活動状況（ ）内は出席人数
10月

- 4日 東京都エイズボランティア講習会（6名）
- 6日 エイズ医療従事者向け講習会（5名）
- 7日 東京都電話相談連絡会（2名）
- 8日 臨時世話人会（5名）
- 9日 HL部門別新人研修（第1日）（14名）
- 14日 エイズ医療従事者向け講習会（4名）
- 16日 HL部門別新人研修（第2日）（15名）
現役スタッフと新人の食事会（15名+シフト2名）
スタッフミーティング（15名+シフト3名）
- 23日～ 新人モニタリング・実地研修随時開始

11月

- 11日 東京都電話相談連絡会（2名）
- 13日 追加HL部門別新人研修（第1日・補講）（2名）
- 20日 追加HL部門別新人研修（第1日）（12名）
現役スタッフと新人の食事会（11名+シフト3名）
スタッフミーティング（9名+シフト3名）
- 24日 平日フォロースタッフミーティング（4名）
- 27日 追加HL部門別新人研修（第2日）（5名）

12月

- 9日 東京都電話相談連絡会（2名）
- 11日 スタッフミーティング（24名）
- 25日 相談業務仕事納め

相談実績報告

ぶれいす東京エイズ電話相談

	10月	11月	12月
日数(日)	5	4	4
総時間(時間)	20	16	16
相談員数(のべ人)	5.5	4	4.5
相談件数(件)	43	31	33
うち(男性)	38	26	30
(女性)	5	5	3
(陽性者)	0	0	0
1日平均(件)	8.6	7.8	8.3

東京都夜間・休日エイズ電話相談（委託）

	10月	11月	12月
日数(日)	14	9	12
総時間(時間)	42	27	36
相談員数(のべ人)	31.5	20	29.5
相談件数(件)	247	162	207
うち(男性)	207	129	160
(女性)	40	33	47
(陽性者)	0	1	3
1日平均(件)	17.6	18.0	17.3

9月の合同研修を終え、10月からのホットライン部門の部門研修に、新人を迎える季節となりました。新人研修は大変ですが、担当するスタッフも、新人からいろいろなプレゼントを頂いています。私も検査の講義をすることになり、猛勉強。他人に伝えるためには、伝える以上のことを身に付けることになり、勉強になりました。相談の方は、数字を見て頂ければわかりますが、安定していました。東京都のエイズ月間もあり、CMも盛んに流れた影響で、相談員は反応を直接感じていたようです。（報告：佐藤）

ぶ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

ティーンズ・クリニック実施状況（ ）内はぶ☆ PEP参加人数

10月18日（6名）

11月20日（7名）

12月18日（8名）

イベント（ ）内はぶ☆ PEP参加人数

10月30日「thinking」参加 @星薬科大学（5名）

12月1日 qoonカフェイベント参加@cafe studio（2名）

その他ミーティング実施状況

・早稲田大学 qoonとのミーティング

10月14日、20日、27日、31日

・thinking 準備ミーティング・反省会

10月9日、14日、18日、25日、29日、30日、

11月23日

・ティーンズ・クリニック打ち合せ・反省会

10月16日、11月20日、12月18日

・ぶ☆ PEP 定例ミーティング

11月27日

相談メール件数

10月 1件

11月 0件

12月 0件

< thinking >

ぶ☆ PEPとGフレの有志で企画・実施したイベント。ドラッグクイーンショーと悩み相談の2部構成で、老若男女・セクシュアリティを問わず、多様性を示すことで「自分らしさ」とは何かを考えるきっかけになってほしい、ということで企画しました。現在、ワークショップ形式が企画・イベントの中心になってきているぶ☆ PEPではなかなか実現できないイベントだったと思うし、普段あまり交流のないGフレメンバーと一緒に活動できてよかったです。慣れないことばかりでたくさん失敗しましたが、いい経験になったと思います。

（報告：じっつー）

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜 11:00 ~ 第3木曜 18:30 ~)

10/6	4人	10/20	5人
11/10	5人	11/17	4人
12/8	4人	12/15	5人

利用者数

10月~12月の期間中、7カ所の病院に通院/入院中の20名の方に、のべ24名のバディスタッフを派遣

活動内容(2005年12月末現在)

派遣継続中	14件
在宅訪問	11件
病院訪問	2件
在宅への電話のみ	1件

10月~12月の派遣調整

新規派遣 4件
派遣終了 4件(死亡による終了:1 ニーズの消失:3)

バディ担当中のスタッフ構成(12月末現在)

女性13名 男性9名

バディ・ワークショップ

11月3日(祝) 午前10時~午後5時
参加者11名 登録者10名

バディの現場から

10月~12月は新規派遣が4件ありました。いずれも短期の派遣でニーズの消失により派遣が終了となりました。また死亡による派遣終了も1件ありました。

11月3日(祝)にワークショップを開催し、修了した10名がスタッフに新たに加わりました。新しい依頼やニーズが増えているなかで少し安心することができました。新人スタッフの皆様、これからいろいろと相談させていただくこととなりますが、よろしくお祈りします。また、これからミーティングに新しいスタッフが参加してきますので、活動中のスタッフの皆様もぜひミーティングにご参加ください。なお定例ミーティングに参加できない場合は個別にミーティングを開催しますので、ご連絡下さい。

(報告: 牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)(*ファシリテーターなど)	
10月	26日	170名	(7名)	(14名)
11月	27日	95名	(1名)	(9名)
12月	23日	111名	(8名)	(2名)

(*はファシリテーター、web NEST運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

ピア・グループ・ミーティング(PGM)

・新陽性者 PGM 第25期(参加者6名)
10/17 10/15 10/29 11/13(修了)

- ・陰性パートナー・ミーティング
10/8(4名) 11/13(2名) 12/10(5名)
- ・ミドル・ミーティング
10/8(7名) 11/13(7名) 12/10(9名)
- ・もめんの会: 10/26(5名)

学習会/イベント

- ・10/25 ストレス・マネージメント講座1(参加者4名)
- ・11/28 ストレス・マネージメント講座2(参加者2名)
- ・12/19 ストレス・マネージメント講座3(参加者3名)
- ・10/30 プラス・ランチパーティ(参加者36、幹事ほか5)
- ・12/11 ネスト年末パーティ(参加者26名)

ミーティング(陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフ)

- ・新陽性者 PGM ファシリテーター・ミーティング
11/22(6、7)
- ・プラスランチパーティ準備会 10/1(4、2)
- ・web NEST 運営委員会
10/1/(2、2) 11/15(2、2) 12/15(1、2)

ネスト・ニュースレター

10/17 10月号発行、11/18 11月号発行、
12/19 12月号発行

* プラスランチパーティ

2004年5月ににつき、第2回目となるプラスランチパーティが10/30(日)に開催されました。この企画は、食べ物を持ち寄って気軽に交流できる場があるといいねということから始まったもので、HIV陽性者とそのパートナーが中心となって運営されています。今回も、アユス、クリアチーボス、SHAREの協力、ジャンププラスの後援をえて、5カ国から36名の参加がありました。幹事、スタッフも含めると総勢48名。あいにくの天候でしたが、国際色・郷土色豊かなお料理が並び、会場は熱気にあふれていました。協力してくさった方々、幹事の皆様、ありがとうございました。(参加者の感想はP.5ご参照)

(報告: はらだ)

Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動

<http://gf.ptokyo.com>

Gay Friends for AIDS 電話相談

10月 15件(平均3.0件)
11月 7件(平均1.75件)
12月 9件(平均3.0件)

イベント「thinking vol.1」開催

10月30日 於: 星薬科大学

観客動員94人 出演者5人 スタッフ11人

ぶ PEPとGフレが合同で行ったイベント。老若男女、様々なセクシュアリティが性について考える場を提供したり、若者がひそかに悩みがちなSTIや望まない妊娠について楽しくオープンに話す場を提供することが目的です。また、セーフアセックスに前向きになってもらったり、多様なセクシュアリティがある中で自分らしく生きるということも提案しています。

今回の第一部はドラァグクイーン(DQ)ショー。第二部では男性(ストレート)、女性(レズビアン)、男性(ゲイ)からの性に関する相談に対しDQ陣がコミカルに回答するという企画でした。

初の試みで課題も見えましたが、「自分らしく生きる」という面が強く伝わったと思います。

voice'05 (詳細は6~7ページ)
11月26日 於:新宿区四谷区民ホール
観客動員483人 出演者101人 スタッフ33人
(報告:タカシ)

HIV陽性者への相談サービス

相談実績 2005年10~12月

2005年	10月	11月	12月
電話による相談	49	36	34
対面による相談	25	24	32
E-mailによる相談	157	121	48
うち新規相談	6	9	13

新規来訪者情報源 (N=28)

web: 9
他団体: 3
冊子・雑誌: 3
電話相談: 2
保健所・検査所: 2
看護師(コーディネーター): 1
カウンセラー: 1
不明: 7

新規相談者の属性 (N=28)

HIV陽性者(男性:20、女性:2)
パートナー・配偶者(男:2、女:2)
親戚(男:1)
知人(男:1)

新規相談の内容

- ・迅速検査でわかった、医療機関の選択はどうすればいいか?
- ・術前検査で陽性と判明
- ・健診で感染が判明。医療に対する不信がある
- ・迅速検査でわかった、地方だがどこの病院がいいか?
- ・友達につきあって検査したら陽性でパニックに
- ・昨日、発症でわかり入院中で話せる相手がいない
- ・妻への告知について
- ・他の女性陽性者と話をしてみたい
- ・ミーティング参加希望(PGM/ネスト/ミドル/女性/パートナー)
- ・ゲイで結婚しているが、家族との関係性について
- ・学生なのだが親には感染を知らせたくない
- ・転勤と医療機関の選択に悩んでいる
- ・生命保険の給付に関する医師の対応について
- ・もともと精神的に不安定
- ・海外在住だが日本の状況について知りたい
- ・失業中だが、経済的な負担はどの程度だろうか?
- ・会社の保険だと医療費の明細がくるので会社にばれないか
- ・一度面談をしたいが、知りあいに会いそうで怖い
- ・自分が感染させてないか? 訴えられたらどうしよう?
- ・子供の持ち物から病名を知る
- ・陽性パートナーから告知されるのが受け入れが難しかった
- ・夫のセクシャリティについて相談する先がない
- ・地方在住、友達が陽性判明でパニックになっている
- ・亡くなった陽性者への病院の対応に疑問

(報告: 牧原 / 福原 / 生島)

研究部門

厚生労働省委託 厚生労働科学研究

「HIV感染予防対策の効果に関する研究」(2003年度から)今年度の研究の柱である、教材パッケージ作成・地域でのクリニック予防介入実践・人材育成・陽性者による直接的啓発活動と陽性者のQOL調査・陽性者による周囲への告知に関する調査などにつき、それぞれ検討を行い、検討結果に基づく実践が進んでいます。地域での予防介入実践としては銀座地区のクリニックと共同で、引続き月一回のペースにて、若者向けのHIV予防啓発活動を実施、また、人材育成事業としては昨年度同様、「性・エイズ教育のための実践セミナー」を(財)日本性教育協会と共催します。セミナーは、2006年1月28日(土)29日(日)、2月18日(土)19日(日)の日程で、2日連続×2回を実施。

「HIV感染者の地域生活支援におけるソーシャルワーカーの連携に関する研究」(2003年度から)
陽性者が就職・就労に関係した場面で活用できるツール(冊子)を開発中です。この冊子は、就職や就労の際に病名の告知をしたいと考えた陽性者にとって、役立つツールとなることを目指しています。

(財)エイズ予防財団助成 研究成果発表会

『知識から意識へ~ HIV予防介入の実践とその評価~』

上記厚生労働科学研究「HIV感染予防対策の効果に関する研究」の成果に関し、「若者の性の健康」をテーマに、広く市民の方々に向け発表する催しです。7月の第一回開催に続き、第二回の発表会として、熊本での日本エイズ学会開催に併せ、12月2日(金)18:50-20:30に熊本市市民会館にて開催。当日は、会場定員を上回る100名以上の方の参加を得、会場参加者に募ったアンケートでも多くの好意的な意見を戴きました。(P.8に関連記事)

(報告: 吉田)

「池上千寿子:エイボン女性教育賞受賞」

あの石鹸で有名な化粧品会社エイボンは、毎年、様々な分野で活躍する日本の女性たちを表彰してきました。そして、2005年度、わがぶれいすの池上代表は、栄えある「教育賞」を受賞し、先日、盛大なるパーティが企画されました。お祝いの席、凛とした美しさで螺旋階段を下りる姿は、映画のシーンを髣髴とさせましたが、骨折の手をかばいつつのドレス&ヒールは、「怖かった」が本当のところらしいです。パーティでは、東氏やまるんず制作によるスライドショーやブブさんによるパフォーマンスと多彩な才能が会を盛り上げました。四十八手ショーでは、若干「年配者」を中心にやや顔が引きつった人が見られたのもご愛嬌、というか予想範囲。おいしい料理とともに参加者は、とても楽しい時間を過ごしました。まだ、日本では誰も注目していなかった80年代からの地道なHIV支援活動がこうした形で世の中に認められたことは、みんなに元気を与えてくれるものです。池上代表、本当におめでとうございました。(記: 兵藤 智佳)



本の紹介と感想

「心に性別はあるのか？」

～性同一性障害のよりよい理解とケアのために～

中村 美亜 著

2005年9月 医療文化社

人は、自分の性別をまるで意識せずに生きることなどできない。性に関する同一性（アイデンティティ）は、性同一性障害と呼ばれる人びとに限らず、誰にとっても、実は身近な問題である。なぜなら、私たちは常に周囲から「あなたは何者であるのか」というメッセージを受けながら生活しているのだから。



こうした“身近な”問題である性同一性について、本書では性同一性障害にまつわる社会的な動きをまとめるとともに、トランスジェンダーの人びとの語りを紹介している。著者自身があとがきでも記しているように、こうした社会的事実であれ、他者のことばであれ、それらをどの立場からどう記述するかは、非常に難しいことだと思う。それはまぎれもなく、「私は何者なのか」を表現する作業であるからだ。本書は、ある意味で著者の性同一性に関する姿勢を示したものと見えるだろう。

著者の中村美亜氏はぶれいす東京の活動にも参加中。本の続きは、ぜひ彼女と直接、話してみたいかたがでしょう。

(野坂 祐子)

「熊夫人の告白」

ベアリーヌ・ド・ピンク / 長谷川 博史 著

2005年2月 ポット出版

自己を大いに晒し読者を喜ばせる半生記9割と、自身への鋭い突っ込み1割でこの本は構成されている。9割の半生記部分においては、著者が自己の性へ過剰さを認識はするが、開き直りつつそれを楽しむ。(マドンナや叶姉妹も同じ部類でしょうが) そんな長谷川さんが素敵です。そして、1割の鋭いつつこみ。ここで、本来は隠しておきたいであろう自身の価値観の根源をも、著者は分析して読者に晒す。自己のコンプレックスを「受け入れ」て「開き直る」こと。こ



れができたとき、自己にも他者にも一回り寛大になれる。しかしそれは非常に難しいこと。そうなれたらいいけど、私は世俗の人間。何かに嫌悪感を抱いたり固執したりするのも、「しょうがないじゃん、何が悪い!」と開き直すこともあり、と再認識させてくれる一冊。

(ぶ PEP ともこ)

「エイズとの闘い～世界を変えた人々の声～」

林 達雄 著

2005年6月 岩波ブックレット

「日本で暮らす感染者は大変ね...」他のアジアの国やアフリカ諸国の人達からそういわれているようだ。エイズの問題は健康上の問題だけでなく、人や社会が作り出す否定や差別の問題、そこに未だ日本(日本人)は見えて見ぬふりをしてやり過ごそうとしている。自分もきっと感染者でなければそうだった。そこには何千年とかけて築き上げてきた文化・習慣が深く



関わってくると思うので、容易に変わるとは思わない。しかしそれは他のどの国でもそうだったはず、であるなら私たち日本(日本人)もきっと意識変革できるはず。

本書では感染者が声を上げることによって国民の意識改革が成功し、高額な治療薬の問題を解決するために政府を動かす国連をも動かすことになった南アフリカやブラジルの例をあげ世界のエイズ対策の現状を述べている。そのことから何が今の日本の課題であるかを訴えかけている。

落ち着いた服薬環境にある私は感染者なのに(というより感染者であることをいいことに!)見て見ぬふりしてごまかそうの中にいるんだなあと感じ、そして、私がHIV検査を受けるきっかけになった今はもう連絡の取れないタイプの(+)の友人のことをふっと思い出した。

今、日本で急激に何かおかしな方向に向かおうとしている感じがしてならない。がんばりたくてもがんばれない奴もいるんだよってことを許容できない国になってしまっている日本が作った障害者自立支援法。『弱いものは弱いなりに生きてきゃいいんだ、でも金は自分で何とかしろよ。』それをおかしいと感じているのにフリーズしている自分が情けない。エイズHIVの問題から「こんな世の中やっぱりヘンだよ」って気づけるようになればいいなと感じる。

(ペンネーム「未だCD4 250」)

編集後記

- ・就寝前のストレッチのおかげか...最近よく眠れます。心身ともにリラックスできるせいでしょうか?(こんどう)
- ・ぶれいすの事務所です「おかたづけプロジェクト」が進行中。目標は「ラクにすれ違える!」。乞うご期待。(やじま)
- ・今年も4月2日(日)にぶれいす東京恒例のお花見の宴が開かれます。年度末の忙しさを乗り切ると、絶好のタイミングでこのイベントが待っています。皆様で穏やかに、楽しく、一緒に過ごしましょう。詳細はwebにて確認してください。(いくしま)

編集・発行: 特定非営利活動法人 ぶれいす東京
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304
TEL: 03-3361-8964 (月-金 12:00~19:00)
FAX: 03-3361-8835
E-mail: info@ptokyo.com
ぶれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>
Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>
web NEST: <http://web-nest.ptokyo.com/>
Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>